

【論文】

大学内の子育て支援施設の現状と課題

——利用者アンケートとアドバイザーインタビューを通して——

黒木 晶・近藤 綾・奥田 梨絵
坂元 敦子・中野 圭子

はじめに

近年では、保育者養成を行う大学が子育て支援施設を設置し、子育て支援活動に力を入れることは珍しくない。養成校が行う活動は、専門性を活かした地域貢献と学生の実践的な学びの提供をキーワードに、その他の地域子育て支援拠点との違いを打ち出して展開している。運営にあたっては、自治体と連携して地域子育て支援拠点事業でひろばを開設するほか、NPO 法人と協働して行うパターン、大学独自で行うなどがあり（児嶋・森・勢井, 2022; 寺本ら, 2025）、大学が独自で行う場合には、運営のための資金を確保することが課題の一つとなっている。

本学の子育て支援活動は、2008 年に短期大学部が学内の 1 部屋を乳児保育室「びよびよ」と称して取り組みを行ったのが端緒である。2016 年には、文部科学省私立大学等改革総合支援事業の「特色を発揮し、地域の発展を重層的に支える大学づくり」（地域特色型）の支援対象校に選定された。その後、2017 年の春に、室内大型遊具を備えた「そのだ子育てステーションびよびよ」（以下、びよびよ広場）を大学敷地内に開設し、保育者養成に携わる大学と短大の教員で運営を開始した。びよびよ広場の開設当初からのねらいは、子どもやその保護者、保育者をめざす学生、保育者を養成する教員など子育てにかかわる人が集まり、これらの人々がつながることのできる場所になることである。また、地域貢献および学生の実践的な学びの場を保障することもねらいとしている。

びよびよ広場は、0 歳～3 歳未満の子どもとその保護者であれば、一世帯何名でも自由に参加することができる。開設当初から現在に至るまで、参加者がいなかったことは一度もない。開設当初は、保育者養成に携わる大学と短大の教員が毎回 2 名ずつ担当してきたが、授業時間との調整が難しく、一部の担当者に負担が偏ったため、2019 年度からは保育経験の豊富な専任スタッフ（以下、アドバイザー）を配置している。つまり現在は、担当教員とアドバイザーの 2 名体制で毎回のびよびよ広場を担当している。

保育者養成大学が行う子育て支援活動に関する先行研究は、主に 3 点に分けることができる。第 1 は、これまでに所属施設が行ってきた活動実績をまとめた実践報告であり、利用者へのアン

ケートなどを用いて実施状況を明らかにしている（例えば、下司ら，2021；児嶋ら，2022；三好・金山，2019；傳馬ら，2025；富田ら，2024；安村ら，2023）。第2は、各大学の実施状況を比較するために、ホームページ情報を調査する、半構造化インタビューを行うなどして動向をまとめたものである（例えば、児嶋ら，2022；寺本ら，2025）。そして第3は、学生の振り返りレポートを分析して実践の意義を明らかにしているものである（例えば、玉瀬・三ツ石・竹内・秀，2025；辻・宮里・岸本・串崎，2017）。大学における子育て支援施設に関する先行研究を分類すると、利用者の状況や他大学との比較を論じた実践報告が多く、学生の学びに特化したものは比較的少ない。また、実践報告の内容として、実施概要に加えて利用者アンケートを行っている研究は比較的多いが、アドバイザーに関する調査を行ったものは筆者らが知る限り見当たらない。

最近では、多くの大学でアドバイザーが配置されており、運営の中心的役割を担っていることも多い。本学のびよびよ広場におけるアドバイザーの役割は大きく、びよびよ広場を開室する時間帯には主軸となって活躍する。アドバイザーを配置する利点としては、年間を通して継続的に利用者とかかわっているため、その日の室内の雰囲気を含め利用者の様子や変化に気づきやすいことが挙げられる。また、本学では、保育者養成の授業の一環としてもびよびよ広場を活用しており、学生が授業で参加する場合は、学生の行うつどい、すなわち、子どもや保護者の前で行う実践活動の内容を確認して助言をする役割もアドバイザーが担っている。このように、本学のびよびよ広場の運営に当たっては、アドバイザーの存在が必要不可欠であり、保育経験の豊富なアドバイザーが継続的に入室しているからこそその気づきがあると予測される。今後も、人と人がつながっていく場所を維持していくためには、利用者が求めるものを知ることに加え、アドバイザーの考えや気づきから運営方法を見直していくことも重要と考えられる。

従って、本研究では、これまでのびよびよ広場での活動をまとめて実態の把握を行い、利用者アンケートおよびアンケートを踏まえたアドバイザーへのインタビューを実施し、びよびよ広場の役割と今後に向けた課題や展望を見出すことを目的とする。なお、利用者アンケートについては、男性教員や男子学生に関する項目を含めて利用者意識を明らかにする。びよびよ広場の担当教員はこれまで女性のみであったが、2023年度から男性教員も担当することになった。また、本学は2025年度から共学となり今後は男子学生がびよびよ広場で実践活動を行う機会も増える。よって、これらの変化に対する利用者の意識も併せて把握することで、今後の活動の在り方を検討したい。

活 動 概 要

1. 開室日時、対象および活動内容

現在、びよびよ広場の開室日は夏休みなどの長期休業日を除いて週に1回程度である。開室時間は、10時40分から12時までとし、大学の2限目の授業時間帯にあたる時間に実施している。

3歳以上になると動きが大きく活発になるため、同じ空間で子どもが安全に過ごすことを考慮して対象は、0歳～3歳未満の子どもとその保護者としている。

1回の活動の流れは次のとおりである。利用者は、事前申し込み不要で開室時間帯であればいつでも入室可能である。到着後、まずは受付で名前を記入し（新規の場合は別途記入および説明）、子どもの月齢と名前を書いた直径4センチほどの円形の色画用紙を子どもの背中に貼る。その後、子どもは裸足になって自由に遊び、保護者は荷物置き場に荷物を置いて子どもと過ごす。活動中、保護者は子どもから目を離すことがないようにしつつ、利用者同士で情報交換をしたり、アドバイザーや教員へ子育てに関する相談を行うこともある。また、授業として毎回3-7名程度の学生が参加しており、その学生と話をすることもある。11時40分を目途に参加者全員で片づけを行い、その後は、つどいを行う。つどいは、毎回学生やアドバイザーが子どもや親子向けに準備した内容を10分程度実施する。その内容は、手遊びや絵本の読み聞かせ、ふれあい遊び、ペープサートやパネルシアターなど、親子で楽しめるものであり、季節や子どもの年齢を意識して毎回内容を変えて行う。つどい終了後は、次回開室の日時や連絡事項を共有して終了となる。

2. 室内の環境

ぴよぴよ広場では、室内環境の整備に特に力を入れている。室内にある遊具はほぼすべて木製のものを使用し、豊富な遊具があることがぴよぴよ広場の特徴の1つである。大型遊具に加え、壁面遊具や指先を使う遊具、ままごと、人形、絵本、大型のクッションなどがあり、親子が楽しめる環境になるよう工夫している（図1・2参照）。また、絵本や壁面飾りを定期的に入れ替えて季節感などが感じられるようにもしている。他に、授乳コーナー、ベビーベッドを備え、畳やマットを使いコーナーを作ることで落ち着く空間を作っている。

もう1つの特徴として、コロナ禍以前から徹底している室内清掃が挙げられる。ぴよぴよ広場は月齢の低い乳児が利用する施設であり、3か月の乳児が利用することもあるため、清潔で安全な環境を保つために開室前後には時間をかけて掃除を行っている。ぴよぴよ広場の開室は10時40分であるが、環境設定や掃除を行うために毎回9時45分から準備にとりかかる。また、12時の閉室後には30分ほどかけて入念に掃除を行う。具体的には、床や棚の掃除、使用した全ての遊具について手作業とおもちゃ殺菌乾燥保管庫で消毒を行い、棚や大型遊具も毎回全て拭きあげている。普段の掃除以外にも、年に2回の大掃除を実施し、室内のものを全て部屋から出して隅々まで掃除を行う。なお、室内には、大型の空気清浄機が2台完備されている。また、万一のけがに備えて傷害保険の加入と救急箱の設置、ぴよぴよ広場開室の度に応急処置用の保冷剤を準備している。このように開室時の安全面だけでなく、その前後で徹底した清掃、おもちゃの管理と必要に応じた補充、ケガへの対策などを行っている。



図1 びよびよ広場



図2 おもちゃの一部

3. 担当者とその役割

びよびよ広場は、毎回、基本的に教員とアドバイザーの2名体制で実施している。教員は、大学教員5名および短期大学教員7名が開室日に交代で担当する。アドバイザーは2名体制で曜日ごとに担当を固定している（現在は隔週で開室曜日が異なる）。なお、アドバイザーは元園長などの保育経験が豊富な方に依頼している。

教員の役割は、主に①運営全体の取りまとめ、②毎回のびよびよ広場の担当である。①については主に、主要メンバーによる運営に関する定期的な会議の実施、開室日や担当者の調整、お知らせの作成と情報発信、問い合わせの対応、利用者名簿、日誌、予算や備品の管理、アドバイザーへの連絡・調整・情報共有、などを分担して円滑な運営ができるようにしている。②のびよびよ担当時には、環境構成、利用者の受付、利用者名簿の管理を行いつつ、学生指導や保護者とかかわっている。また、活動終了後には、その日の様子や次回に引き継ぐ内容を日誌に記入する。アドバイザーの役割としては、開室前の環境構成と清掃、学生が授業で参加する場合には、学生の行うつどいの内容を確認して助言を行う。開室中は、子どもの見守りや保護者とかかわりを行いながら、適宜、全体を見通して親子に言葉をかけ、安心感を与えている。また、片づけのアナウンスやつどいの進行も行う。そして、閉室後には、教員や学生とともに清掃し、アドバイザー、教員と学生で実践の振り返りを行い、学生が気づきを深められるようにしている。引継ぎ事項がある場合には、アドバイザー同士で情報共有を行うなどの連携体制も整えており、活動中は中心的な役割を担っている。

4. 実施回数と利用者数の推移

2017年に開始したびよびよ広場であるが、状況に合わせて実施の形態を変え、現在の形に至っている。表1は、2017年度～2024年度までの8年間の利用者数をまとめたものである。開始から3年間は週に2回開室し、年間で2000名を超える利用者数であった。新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、2020年度と2021年度は実施していない。2022年9月から月1回程度、特定のテーマについて専門的な話をする講演会形式で再開することとなったが、1日10組限定の人数制限を設け、申込フォームから事前に参加受付し、感染防止に配慮した形で実施し

た。2023年1、2月は1日15組と参加の枠を広げ、2022年度は合計7回実施した。2023年4月からは従来通りに親子が自由に過ごす広場型へ形態を戻し、週1回程度開室した。同年5月、新型コロナウイルス感染症の5類への移行に伴い、人数制限なしで事前予約も不要とした。その際、予算の関係や教員が担当できる回数を見直し、週1回での開室とした。そのため、年間の実施回数が減り、2023年度、2024年度利用者数はコロナ禍以前よりも減っている。しかしながら、1回あたりの子どもの数を見ると開室当初から人数に大きな変化はみられていない。また、年度ごとに初めて参加する場合のみ利用者の登録を行っているが、各年度の新規登録者（子ども）と子どもの利用者数を見ると、リピーター率の高さが本学の子育て支援施設の特徴の1つといえる。

表1 年度別の利用者数

年度	実施回数	新規登録者 (子どもの数)	子ども	保護者	利用者の 合計	1回あたりの 子どもの数 (平均)
2017	86	279	1617	1168	2785	19
2018	88	153	1192	1078	2270	14
2019	79	231	1349	1281	2630	17
2020	0	0	0	0	0	0
2021	0	0	0	0	0	0
2022	7	21	44	40	84	6
2023	40	106	499	496	995	12
2024	33	127	496	454	950	15

調 査

1. 利用者へのアンケート

目的

びよびよ広場の活動における利用者意識を明らかにすることを目的とする。

方法

対象および時期 びよびよ広場を利用する保護者23名（女性22名、男性1名）であった。調査時期は20XX年12月から20XY年2月にかけて依頼した。

質問項目 全部で19項目尋ねた。はじめに、子どもとの関係、回答者の年代、子どもの年齢、いつから通っているか、今年度の利用回数、びよびよ広場を知ったきっかけについて尋ね、その後以下の9項目について4件法（そう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、そう思わない）で回答を求めた。具体的には、1. 子どもが楽しく過ごせているか、2. 遊びに満足しているか、3. 遊具やおもちゃに満足しているか、4. 教員の対応や言動に満足しているか、5. 学生の対応や言動に満足しているか、6. 男性教員が入ることへの抵抗があるか、7. 男子学生が入ることへの抵抗があるか、8. 総合的に満足しているか、9. 今後も利用したいか、であった。また項

目6・7でそう思う、ややそう思うと答えた場合には理由についても回答を求めた。その後、びよびよ広場を利用してよかったと感じること（複数選択可）、気になったことや要望、その他、を尋ねた。

手続き 調査は Google Forms を活用してオンラインで実施した。利用者に主旨を説明し、QRコード提示して回答を求めた。Google Forms のはじめのページにも調査内容の主旨を記し、無記名にて実施した。

倫理的配慮 調査を始める前に、協力は任意であり、結果は統計的に処理され個人が特定されることがない旨を記載した。その後、同意の可否についての項目を設け、同意を得た場合にのみ実施した。

結果と考察

23名の回答結果から、びよびよ広場の利用者は、そのほとんどが子どもの母親で、95.7%を占めていることが確認された。年代は30代が最も多く（69.6%）、次いで40代（21.7%）、20代以下（8.7%）であった。子どもの年齢については最も多かったのが19-24ヶ月であり（29.2%）、次いで6-12ヶ月および13-18ヶ月（いずれも25.0%）となっている。年齢別では、1歳児の参加が最も多かったが、これは調査時期が年度末であったためと考えられる。

利用開始年度については、当該年度から利用を開始したとする回答が73.9%と最も多かった。前年度からの継続利用は8.7%、それ以前からの利用は17.4%であった。「それ以前」と回答した利用者は4名であり、回答からは、兄弟姉妹で継続的に利用している様子が見えなかった。また、アンケート実施時点での年度内における利用回数についての結果は、2～5回が最も多く（43.5%）、次いで6～10回（21.7%）であった。初回利用（17.4%）および11回以上の利用（17.4%）も一定数確認された。

図3は、びよびよ広場を知ったきっかけについての回答をまとめたものである。最も多かったのは、「友人や知人からの情報」で39.2%、次いで「大学入り口付近の掲示物」（17.4%）、「園田学園幼稚園からの案内」（13%）、「大学のウェブサイト」（8.7%）、「他の利用者からの紹介」（13%）

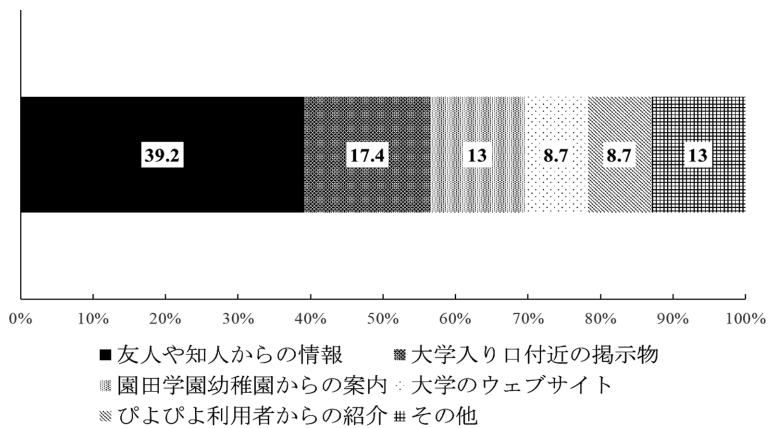


図3 知ったきっかけ

れも 8.7%) の順であった。「その他」の具体的な回答としては「園田学園大学附属園田学園幼稚園の看板の掲示物」「幼稚園のウェブサイト」「訪問に来てくれる助産師さんからの情報」が挙げられた。

表2は、びよびよ広場における9項目に関する利用者意識をまとめたものである。まず、子どもの過ごし方や遊び方、遊具・おもちゃに関しては、いずれも高い満足度が得られた。特に遊具やおもちゃについては9割以上が肯定的に評価しており、施設環境の充実が利用者に強く支持されていることが分かった。

表2 利用者意識調査結果 (n=23)

項目	とても そう思う	やや そう思う	あまり そう思わない	そう 思わない
1. 子どもが楽しく過ごせている	18 (78.3%)	5 (21.7%)	0	0
2. 子どもの遊びに満足している	17 (73.9%)	6 (26.1%)	0	0
3. 遊具やおもちゃに満足している	21 (91.3%)	2 (8.7%)	0	0
4. 教員の対応や言動に満足している	20 (87.0%)	3 (13.0%)	0	0
5. 学生の対応や言動に満足している	15 (65.2%)	8 (34.8%)	0	0
6. 男性教員が入ることへの抵抗がある	3 (13.0%)	1 (4.3%)	0	19 (82.6%)
7. 男子学生が入ることへの抵抗がある	2 (8.7%)	3 (13.0%)	2 (8.7%)	16 (69.6%)
8. 総合的に満足している	18 (78.3%)	5 (21.7%)	0	0
9. 今後も利用したい	22 (95.7%)	1 (4.3%)	0	0

次に、教員の対応については約9割が肯定的に評価した一方で、学生の対応については約3分の2が「とてもそう思う」と回答し、教員に比べて評価がやや分かれる傾向がみられた。これは、利用者と学生が確実にかかわりをもつことができるのがつどいの場面であり、それ以外での利用者と学生の直接的なかかわりに差があることが可能性としてうかがえる。また、項目6・7については、本学が共学化したことや、教員の担当を女性のみから男性教員へ拡充したことから項目として尋ねた。多くの利用者が男性教員と男子学生に「抵抗はない」と答える中で、約2割程度が何らかの抵抗感を示していた。自由記述では「子どもと親の気持ちを理解しているのであれば性別は問わない」「特に男性だから気になるということはない」といった意見が得られ、性別そのものが必ずしも問題視されていないと考えられる。一方で、「はじめは不慣れがあるかと思うが時間が経てばよくなっていく」「男性に人見知りが強いので男性ばかりだと遊びづらくなる」「男性教員のように子どもの様子を見て適度な距離をとってもらえれば問題ない」といった記述もみられ、一定の不安や留意点が存在することも明らかとなった。すなわち、男性教員や男子学生の関与に対する利用者の評価は概ね肯定的であるものの、一部には子どもの反応や学生のかかわり方に応じて安心感が左右される可能性が示唆された。総合的な満足度については約8割が「とてもそう思う」と回答しており、今後の利用意向に関しては9割以上が継続利用を希望した。これらの結果から、びよびよ広場が地域の子育て支援施設として高く評価されていると同時に、今後は学生や男性スタッフの関与に関する利用者の安心感をどのように高めていくかが課題

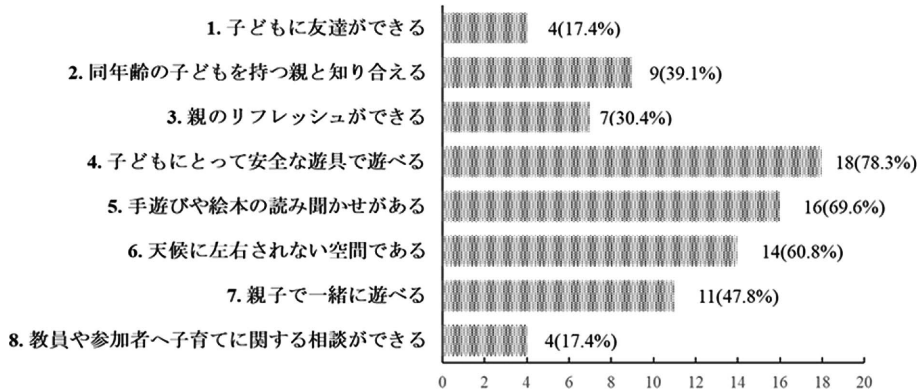


図4 利用における利点（複数回答）

といえる。

図4は、ぴよぴよ広場の利用における利点（複数回答）の結果を示したものである。最も多く挙げられたのは「子どもにとって安全な遊具で遊べる」（78.3%）であり、次いで「手遊びや絵本の読み聞かせがある」（69.6%）、「天候に左右されない空間である」（60.8%）が続いた。これらは、子どもの遊びや活動環境の安全性・多様性に関連する項目であり、特徴の1つとしている施設の物的環境が特に高く評価されていることがうかがえる。また、「手遊びや絵本の読み聞かせ」の活動は、学生が授業の一環として関与している取り組みである。利用者から高く評価された背景には、学生が主体的に子どもとかわるることにより、子どもに多様な遊びや表現の機会を提供できていると考えられる。これは、施設が単に遊具や空間を提供するだけでなく、教育的プログラムの一部として学生が参加することで、子どもの発達の効果と保護者の満足度の双方に寄与していることを示唆している。さらに、学生が授業の一環として取り組むことにより、実践経験を積む場としての機能も果たされている。すなわち、ぴよぴよ広場は、地域の子育て支援施設としての役割に加え、学生の実践の場としても相互的に意義を有しているといえるだろう。

また、「親子で一緒に遊べる」（47.8%）や「同年齢の子どもを持つ親と知り合える」（39.1%）といった、親子間・保護者間の交流機会に関わる項目も一定程度評価されており、ぴよぴよ広場が社会的つながりを生み出す場として機能していることも確認できた。加えて、「親のリフレッシュができる」（30.4%）という回答も3割程度得られており、子育て支援施設が保護者の心理的負担を軽減する場として寄与していることが示唆された。一方で、「子どもに友達ができる」（17.4%）や「子育てに関する相談ができる」（17.4%）は比較的低い割合に留まっており、今後の改善の余地が見られた。この他には、「まだ歩けず公園などでは遊びづらいため、室内で遊べる場所はありがたい」、「周りで見ってくれる大人が多いので安心して遊ばせられる」、「値段が高い（質の良い）玩具が置いてある」といった記述回答も寄せられた。

最後に、気になったことや要望、その他の自由記述の回答からは、主に2つのカテゴリーに分類できる意見が得られた。1つは「開室時間・スケジュールに関する要望」であり、特に午前中

の早い時間帯（10時頃）から開室してほしい、あるいは開催日数を増やしてほしいといった要望が複数寄せられた。もう1つは「学生の関与に関する意見」であり、学生の学年が分かると安心感につながるとの声があった。これらは、施設運営の柔軟性や学生の実践に関して利用者が一定の関心を持っていることを示唆している。加えて、自由記述の中には「いつも楽しく利用させてもらっている」「週2になるとさらに嬉しい」といった肯定的な意見もみられた。これらの記述は、びよびよ広場が利用者にとって日常的に価値ある子育て支援の場となっていることを示すといえるだろう。

2. アドバイザーへのインタビュー

目的

利用者アンケートの結果を踏まえたアドバイザーの意識を明らかにすることを目的とする。

方法

対象および時期 アドバイザー2名（A・B）に半構造化法によるインタビュー調査を実施した。アドバイザーは2名とも園長経験者であり、1名は大学での指導経験者でもあった。調査時期は利用者アンケート終了後の20XY年2月であった。

質問項目および手続き 5項目を訪ねた。具体的には、1. 利用者アンケートを見ての感想等、2. 担当してよかったと感じる点、3. 担当して不安や心配を感じた点、4. 担当として意識していること、大事にしていること、5. 今年度の課題と次年度に向けた改善策、であった。インタビューは、びよびよ広場閉室後にアドバイザーそれぞれに対して教員2名が実施した。まず、インタビューの主旨と質問項目を説明し、利用者アンケートの結果を説明してから開始した。インタビュー内容は、あらかじめ同意を得たうえで、ICレコーダーを用いて録音した。

倫理的配慮 インタビューをはじめの前に、協力は任意であること、インタビュー内容は論文等に掲載するために録音するがそれ以外の目的では使用せず責任をもって管理することを説明し、同意を得て実施した。

結果と考察

インタビュー内容を録音したICレコーダーをもとに逐語記録を作成した。表3は、利用者アンケートの感想をまとめたものである。2名とも共通して、開室の時間帯について言及しており、保護者の意見に寄り添う様子がうかがえた。現在は、つどいが終わって閉室するのが12時であるため、Aが語るように、眠くなったりお腹が空く時間と重なる。Bは遊びが充実する時間に着目している。このように、子どもの生活リズムや遊びを考慮した時間帯を検討することが課題であると考えられる。また、Aはつどいについても述べており、事前に利用者の数や子どもの年齢が分からない中でつどいの内容を検討する難しさに触れている。0歳と2歳では集中力や興味のある遊びが異なるため、1歳くらいを想定した絵本や歌を選ぶなど、月齢差に配慮した遊びの工夫を行っていることが分かった。他に、学生の身だしなみについて、びよびよ広場に関しては爪の長さやアクセサリなどについては指導しているが、髪色は学外の実習等と同様の厳

格な基準を設けていないため、事前指導の見直しを行うことが今後の課題と考えられる。Bからは、保護者間の交流機会になっている点について、びよびよ広場のこれまでの経過や内部事情も踏まえ、具体的な提案がなされた。現在のびよびよ広場の形態は、それぞれ親子で自由に遊び、つどいに参加する流れであるが、月齢を踏まえたつどい時間の設定や、親同士をつなぐ場を設定するなど、運用形態も含めた検討の必要性がうかがえる。

表3 利用者アンケートを見た感想

発話者	内容
A	<p>開室の時間について、時間を前倒しにしてほしいという意見がありますが、実際に眠くなくなりぐずったり、お腹がすく時間と重なるためそういう意見があることは分かります。また、つどいは月齢差があって難しいです。保護者はしてほしいと思っているかもしれませんが、子どものことを考えるとかわいそうと感ずることがあります。0歳で寝ている子どももいるし、2歳後半の子どもは動きが大きい。(時間を早めにする場合、つどいを先にするという流れの方がよいでしょうか。)つどいを先にすると、遊び続けることになるので帰るタイミングが難しいと思います。片づけをして区切りをつける方が流れがスムーズですね。</p> <p>(月齢についてはどうですか?)月齢差があるため、1歳位を想定して絵本などを選ぶようにしています。また歌があるものを選んだりしています。</p> <p>(他に何かお気づきの点はありますか?)保護者は学生を大学の代表として見ています。服装や明るい髪色、爪が気になることがあります。(中略)古い考えかもしれませんが、保護者の方はあまり気にされないのかもしれませんが、髪があまりにも明るい色等はどうかだろうと思ってしまって。</p>
B	<p>同年齢の子どもの親と知り合う機会になったと思うのであれば、そういう場を作ってあげるのもいいかもしれませんね。(中略)過去に、月に1回くらいテーマを決めて大学の先生が少しお話をすることもしたことがありますけど、結局、子どもが離れられないというのがあります…でも、20分でも親同士がちよっと交流できるようなことを先生方にしてもらったら、親同士のつながりがもう少しできて、たぶんそういうことがニーズとしてあるのかなと思いました。まあ時間とか難しいですね。2コマとったらできるのかもしれませんが。1限目と2限目を学年別にする形だと2コマとれるでしょうか。そうしたら10時～11時とか1番子どもの遊びが充実するかもしれません。</p> <p>今年度で終わりという人はたぶん、育休終わりとかで保育園に入って辞めるのではないかと思います。理由を聞いてないから分かりませんが、そうかなというのは推測されます。</p> <p>保護者の要望は、やはり時間と回数なんですね。</p>

※ () は、インタビュアーの発言

表4は、担当して良かった点をまとめたものである。2名とも共通して、子どもとかわかることが楽しいと感じていることが分かった。Aは、アドバイザー経験がきっかけで新たに資格取得を目指そうと考えており、びよびよ広場での経験が自身の新たな学びにつながっていた。また、資格取得の理由の一つとして、保護者からの相談に対して専門的な話ができるようになりたという思いがあり、アドバイザーとしての意識の高さがうかがえた。Bは、子どもだけでなく保護者の慣れや余裕、そして学生の成長や学びについても語っており、びよびよ広場がかかわる人すべての学びや経験値を高める場として機能していることが明らかになった。

Bが語っていた学生の学びに関して、授業としてびよびよ広場に入り、つどいを行った4年生の活動記録からは、アドバイザーの指導が学生のこれまでの学びを統合する役割を果たしている

ことがうかがえた。具体的には、アドバイザーの前でつどいの内容を練習した際に、動作や視線、姿勢、声のトーンなどに関する助言を受け、そのことを意識したことで、実際のつどい時に

表4 アドバイザーとして担当してよかった点

発話者	内容
A	<p>色々な子どもと接することができて楽しいです。保護者の方もみなさん協力的ですよ。好意をもって関わってください。とても楽しいです。</p> <p>びよびよの経験からもっと勉強したいと思うようになりました。福祉系の資格をとりたくて、この4月から大学の通信制で勉強します。(びよびよを担当されたことがきっかけの一つになったということでしょうか) はい。保護者の方から相談を受けた際にもっと専門的に答えられるようになりたいと思っています。</p>
B	<p>子どもとかかわらせてもらって、子どもの成長をみられるのが一番楽しかったのと、通年でびよびよに入ったのが今年初めてなので、1年生と4年生の学びの差をよく感じました。短大の1年生は前期で4年生は後期に入るから、入学したばかりと卒業前になりますよね。短大生は2年間の学びだから2年生で見るわけではないけど、入学当初の大学1年生とそんなに姿が変わらないとしたら、やっぱり4年間の学生の育ちはすごかったです。お母さんが違うというのものもあるかもしれません。何度も来ているとだんだん親も慣れてくるし、子どもも大きくなって慣れてきます。(中略) 後期は4年生が入って、親も慣れていくという感じです。やっぱり学生さんは全然違うから、4年間の学びはすごいです。もちろん実習とか、彼女たちのそれぞれアルバイトの経験とかもあるかもしれないですが、同じ場で見た時に、それだけ育ちがあることは活用できたらいいだろうなと思いますね。</p>

※ () は、インタビュアーの発言

表5 アドバイザーとして担当して不安や心配を感じた点

発話者	内容
A	<p>子どもと接することがない先生と一緒にいる時は、一人で対応できず SOS を出したことがありました。例えば、保護者がトイレに行っている時と他の子どもを抱っこしている時が重なった時に、危険やけががないように見守ることが難しい場面がありました。</p> <p>柵の位置は、一度変更してみましたが、あまり変化はなかったですね。滑り台を滑ってきたスペースに参加者が固まってしまうので、遊具を置いている柵の位置を変えてみましたが、そこで遊んでいる人はあまりいませんでした。滑り台は怖い場面があるので、手すりのところに保護シートを貼ってもらうことはできないでしょうか。滑り台の構造的に少し怖いです。(子どもによって、勢いよく滑る子どももいますね…環境構成については、人の心理で、入口付近に集まってしまうということもあるので、奥の方に行きやすいように環境を変えるのも良いと思います。)</p>
B	<p>後期の1回目に保冷剤がなかったことがありました。4年生の授業になった時になかったから、役割が変わったのかと思いました。担当の先生に確認して、それ以降はそのようなことはなかったのですが、準備の段階で少し心配だった事はそれが1回あっただけです。</p> <p>けがが起こったときにどうするかという対応です。帰る用意をしている時に、少し頭を打った子どもがいて、冷やしてそのまま保冷剤を持って帰ってもらったことがあったと思います。大したけがではなかったし、親も大丈夫ということでよかったけど、私が担当した回に1回だけありました。もしもの時に慌てないよう、フローチャートみたいに、例えば保健室に連れて行くとか、ここへ連絡するとか、緊急の時にどうしたらいいかというような共通のマニュアルのようなものがあった方がいいのかなと思いました。</p>

※ () は、インタビュアーの発言

子どもの前で自信をもって実践できたこと、やりとりをする楽しさを子どもや保護者と共有する大切さを再認識できた、などの記述であった。インタビューを行った年度では、授業の一環として短期大学1年生と大学4年生がびよびよ広場で実践活動を行っており、4年生はつどい実施の他、びよびよ広場開室前の環境構成から閉室後の掃除までを行った。その中で、アドバイザーが行った学生へのワンポイント的な助言指導は学生の自信や学びの統合として機能しており、学生にとっても有益であったことがうかがえる。アドバイザーは、年間を通して継続的に利用者や学生とかわかっているからこそ、年度初めの保護者の緊張感、くり返し参加することでの保護者の気持ちの余裕、学生と保護者との関係や学生の学びを語ることができ、細やかな対応が可能になると考えられる。そして、これらがアドバイザー自身の成長のきっかけになり、担当してよかった点へとつながっている。つまり、びよびよ広場がかかわる人すべての学びや経験値を高める場としてうまく循環していると捉えられるだろう。

表5は、担当して不安や心配を感じた点をまとめたものである。2名とも共通して、毎回ペアになる担当教員について述べていた。保育を専門としない教員が担当者として入ることもあり、対応が重なる場面では特に意思疎通が取れないとアドバイザーに負担がかかり、安全の保障が難しくなることが示された。また、環境構成や安全対策についても言及しており、担当者間の連携の強化、連絡体制の整備、さらなる安全対策も今後の課題と考えられる。

表6は、アドバイザーとして意識していること、大切にしていることをまとめたものである。2名ともが共通して、安全に過ごせる環境を挙げている。4年生の活動記録からも、安全面に關する記述が多くみられた。具体的には、はいはいが基本の子ども、歩行が安定していない子ども、自由に歩ける子どもなどが一緒に過ごすため、けがをしないように見守ることが必須であるという内容であった。けがを防ぐための予測や、目の前の子どもだけでなく全体を見ることの重要性についても述べられていた。さらに、月齢の低い子どもがおもちゃを口に入れたりなめたりする様子から、こまめにおもちゃを消毒する必要があることに気づく様子がみられた。これらの学生の気づきは、授業や実習を通じたこれまでの学びと、アドバイザーや教員の実践的な指導や安全に対する意識がうまくつながったことを示しているといえるだろう。

他に、Aは利用者とのかわり方について述べており、子どもの名前を呼びながらやりとりを行うなど、コミュニケーションを大切にしていることが分かった。Bは学生とのかわり方について、卒業前の学生が保護者とのコミュニケーションのとり方や現場の環境構成などを具体的に学ぶ機会となるように配慮していることが明らかになった。毎回、新規の利用者が訪れる施設において笑顔で柔らかな雰囲気づくりを意識することは子どもだけでなく保護者にとっても安心感につながる。雰囲気づくりの意識はリピーター率の高さの一因とも捉えられるだろう。また、びよびよ広場が子育て支援の場であるとともに学生の教育の場でもあることを踏まえて指導のあり方を常に検討している点については、学生の活動記録からも、子どもと保護者へのかかわり方や環境構成に関する気づきを実感したという内容が多く記述されていた。具体的には、かわり方について、適切な距離感をつかむことや子どもをよく観察して興味のある遊びを知ること、好

きな遊びを通して言葉をかける工夫、表情に気をつけることなど、かかわりのタイミングをみつける難しさを感じる一方で学生なりの視点をもって実践していた。環境構成に関しては、アドバイザーが語ったおもちゃの置き方について触れ、具材を皿に入れる時に果物と野菜を分けて机の上に置くなど、子どもが遊びたくなる環境づくりを意識した点であった。これらの記述は、アドバイザーの意図と学生の実感を伴う理解がつながったことを意味し、アドバイザーの意識や大切にしている観点が活かされている証といえる。

表7は、今年度の課題と次年度に向けた改善策をまとめたものである。Aからは特になかったが、Bはバギー置き場と遊具の点検について述べており、防災意識や安全意識に関する課題が明らかになった。

表6 アドバイザーとして意識していること、大切にしていること

発話者	内容
A	<p>けがないようにすることです。</p> <p>あとは、できるだけ色々な人に声をかけることを意識しています。お子さんの名前を呼んで言葉を掛けることも心がけています。そうすると、保護者の方も嬉しそうにされています。</p>
B	<p>学生が入っている時は出来るだけ学生にかかわってもらって、私は見ておくようにした方がいいかなと思って、学生が固まっていたら分散するよう伝えました。開室前に、こんなふうに分かれると良いと学生へ伝えました。また、学生がかかわってなくてポツンとされてる方は意識して声をかけるようにはしました。</p> <p>安全面も意識しました。子どもさんによってはちょっと走り回ることもあるので、注意してみるようにしています。せっかく来てもらってけがをするのはよくないので。あとは、特にすぐ意識したというようなことはありません。</p> <p>大学4年生の方は2コマだったので、事前の準備を学生と一緒にしました。私も環境構成についていろいろ悩んでいますが、おもちゃを出す時に、おもちゃの置き方などを伝えていきます。例えば、ままごとだったら、お皿を2つ出して、子どもが分かりやすいように果物と野菜を分けて入れるなどの工夫です。アイスだったら、並べて置くと、全部で何個あるか子どもも分かるし、片づけの時に片づけられているか分かります。保育園の場合、これを毎日やっていたら、片づけの時におもちゃがなくなったとしても気づけます。ぴよぴよでも、環境構成をする時に、おもちゃの有無を確認できます。(中略) 畳の敷き方も、段差があると分かるようにへりの向きを考えて敷くことを伝えました。最近では市松模様置いてみたりもしています。歩き始めの子どもは段差で転ぶことがすごく気になるから、それが分かるようにしています。畳は縦も横も同じ大きさだから、色んな並べ方があるけど、私はこういう考えで置いているということを伝えます。そんな風に考えることが保育における環境構成であるということも伝えています。</p>

表7 今年度の課題と次年度に向けた改善策

発話者	内容
B	<p>途中で変わったけど、バギー置き場は課題だったのかもしれない。利用者が増えるとバギーが多くなるから、防火扉の前に置かないように考える必要があります。また、掃除をしながら遊具の点検も行っていますが、業者の人の点検は何年に1回入るのでしょうか？雨ざらしじゃないので問題ないとは思いますが、例えば緩むとかもあるかもしれないので、大きい遊具を入れてもらった業者の担当さんに聞いてみるといいと思います。</p>

ま と め

本研究の目的は、これまでのびよびよ広場の実態を把握し、利用者アンケートとアドバイザーインタビューを通して、今後のびよびよ広場における課題や展望を明確化することであった。これまでの活動概要、利用者アンケートおよびアドバイザーのインタビュー結果からは、びよびよ広場の活動に関する役割3点と、課題2点が挙げられる。役割としては、第1に地域子育て支援施設としての役割、第2に学生の実践的な学びの場としての役割、そして第3に教員の教育研究活動としての役割である。また、今後の課題として、第1に地域子育て支援施設としての課題、第2に学生の実践的な学びに関する課題が挙げられる。以下、それぞれについて論じる。

役割に関して、結果からは改めて、びよびよ広場が保育者養成を行う大学の地域子育て支援活動として機能していることが明らかになった。開室して8年が経ち、開設当初から変わらず安定的に親子が施設を利用している。利用者アンケートの結果も高評価を得ており、リピーターが多く、「総合的に満足している」「今後も利用したい」と希望する利用者が多くいることが明らかになった。この背景には、本施設の特徴の1つである遊具の充実、学生による実践の提供、そして大学内に設置された屋内施設であることが挙げられた。これらの結果は、保育者養成校だからこそ行える地域貢献活動と捉えられ、今後も大学の特色を生かして子育て世帯に多様な資源を積極的に還元していく意義が示されたといえる。また、活動概要の中で論じたびよびよ広場の特徴の1つである徹底した掃除に関して、この点は利用者からは分かりづらい部分であるが、これまでに大きな事故や集団感染などの事案は一度も生じていない。首が座っていない月齢の低い子どもから走り回る子どもまでが一同に同室で活動する場において、安全面、衛生面や環境構成に十分配慮して維持してこれたことは、教員とアドバイザーの努力の成果といえるだろう。

学生の実践的な学びの場としての役割に関して、これまでに多くの学生が授業の一環としてびよびよ広場での実践活動を行ってきた。また、ボランティアを希望する学生も広く受け入れてきた。この背景には、4年間の養成課程では、資格・免許に必要な学外実習などにおいても、月齢の低い乳児やその保護者とかがかわる機会が圧倒的に少ないため、少しでもかかわりをもって現場に出てもらいたいという教員側の強い思いがある。利用者アンケートやアドバイザーのインタビューの中でも学生の学びに関する好意的な内容が挙げられており、学生の活動記録からも実践的な学びの意義が明らかになった。これらのことから、びよびよ広場は、学生と保護者とのかかわりの機会に加えて、学生が授業で学んできたことを踏まえて掃除などを含めた環境構成を考える力、子どもの年齢に応じた活動を考えて実践する力など、保育者養成カリキュラムを補完した実践的な学びを保障する役割があるといえる。そして、アドバイザーの助言指導は学生の学びを統合させる役割を担っているといえる。さらに、びよびよ広場は、施設を管理・運営し、担当する教員の教育研究活動の一環としての役割も考えられる。びよびよ広場を担当する教員の多くは、子育て支援に携わった経験が浅く、施設の管理や運営の経験に長けているわけでもない。その中

で毎回、安全に配慮しながら、時々の問題に対応して連携しながら開室を続けている現状がある。アドバイザーのインタビューにおける不安や心配を感じた点の中でもこれらの視点は語られており、びよびよ広場を大学内の施設として運営するにあたっては、教員の学びの機会や研究活動の一環としての機能も重要な役割として捉えることができるだろう。

課題と展望について、第1の地域子育て支援施設としての課題は、施設を運営していく体制の維持と活動資金の確保である。要望として多く挙げられた開設日を増やすことや開設時間については、これまで何度も検討を重ねてきた。本学は、自治体の委託としてではなく大学独自でびよびよ広場を運営しているため、開室日時などの制限に縛られず特色を生かしやすいという利点がある一方、学内予算の中で施設運営に関するすべてを賄う必要があるという難しさもある。そのため開設日の追加については人件費的にも厳しい現状がある。また、開設時間については、担当教員の確保や授業の一環として学生を配置することを考慮すると、大学の2限目の授業時間帯で開設することが最良であると考えられる。従って、制約の中でいかに利用者の要望に対応できるかを今後は検討していきたい。

その他、男性教員の担当者や共学化に伴う男子学生への抵抗感については、男性教員や男子学生と利用者の双方への丁寧な情報共有を行う必要性が考えられる。懸念されることとして、授乳や利用者によってはおむつ替えの際に男性に抵抗感を示す場合などが考えられる。まずは不安を感じる状況を把握し、その対策を考えたいうえで、利用者への丁寧な説明、教員とアドバイザー間の情報共有、そして学生への事前指導をしっかりと行い、これまでと変わらずに過ごせる空間の維持に努めたい。なお、最近では父親のびよびよ広場参加も珍しくないため、男性がいる施設の在り方を検討する良い機会と捉え、今後も男性の受け入れ体制を積極的に整えたい。また、利用における利点として比較的少数意見であった、親子間・保護者間の交流の機会、親のリフレッシュや子育てに関する相談などの意見にも目を向け、びよびよ広場がさらに社会的なつながりを生み出す場として機能していけるように検討したいと考える。専門性のある教員や保育経験の豊富なアドバイザーが毎回担当していること、学生も4年生にもなれば一通り保育を学んだ専門家といえることを踏まえると、このような人的資源をいかに活かせるかが大学における子育て支援の役割といえる。従って、これまで以上に人的資源を特徴とした取り組みにも力を入れていきたい。

第2の学生の実践的な学びに関して、授業の一環としてどのような目的をもってびよびよ広場での実践を行っていくかが今後の課題として挙げられる。現状では、つどい以外の子どもや保護者とのかわりについては学生に任せている。学生は保護者と積極的に会話することに躊躇いがある場合が多く、子どもとおもちゃを介してやり取りをし、その延長に保護者がいる場合に控えめにかかわる傾向が強い。また、限られた授業時間内で実践を行うため、4学年すべてがびよびよ広場を経験するわけではなく、入る回数も1年に1回ないしは2回程度に留まっている。つどいは、大学4年生が主に担当し、1年生や2年生が入っている場合は4年生の様子を観察するのが現状である。利用者からは、つどいについて高評価が得られた一方、学生の学年が知りたいという意見もあった。また、アドバイザーからは学年に応じた指導内容の必要性や身だしなみに

関する指摘が明らかになった。カリキュラムとしてどう落とし込めるか、1年生から段階的に学びを深める系統だった学びの在り方を検討する必要がある。また、就職後の保護者対応を見据えるのであれば、ただびよびよ広場に参加するだけでなく、そこで何をどう学ぶか、保護者とどうかかわるかなど、事前事後指導を含めて4年間の学修内容の目標を設定することも考えられる。それらは、本学養成課程の学びの特色としても意義があるため今後の積極的な検討課題としたい。

今後に向けた展望や課題は多くあるものの、需要が途切れず継続的に維持してきたことに大きな意義がある。開設当初のねらいである、子どもやその保護者、保育者をめざす学生、保育者を養成する教員など子育てにかかわる人が集まり、つながることのできる場所になる、という点はうまく機能しているのではないだろうか。今後もさらに充実した施設となるよう取り組んでいきたい。

謝辞

本調査にご協力いただきました「びよびよ広場」利用のみなさま、アドバイザーのA先生、B先生に心より感謝申し上げます。

文献

- 下司実奈・曾田里美・稲垣由香里・菅野由美子・丸山有希・内正子（2021）大学を拠点とする多職種による子育て支援事業－「子育てコラボサロンどーなつ」の実践－ 神戸女子大学健康福祉学部紀要, 13, 1-12.
- 児嶋輝美・森万里子・勢井香菜子（2022）保育者養成校が行う子育て支援の取り組みについて－本学のベンギンクラブ子育て支援イベントの成果と課題－ 徳島文理大学研究紀要, 103, 37-48.
- 三好年江・金山時恵（2019）子育て支援施設を利用することによる親子の育ち－質問紙調査における自由記述の内容分析から－ 新見公立大学紀要, 40, 203-210.
- 玉瀬友美・三ツ石行宏・竹内日登美・秀真一郎（2025）大学を拠点とした学生による子育て支援の取り組みについて－活動の振り返りに焦点を当てて－ 高知大学教育学部研究報告, 85, 43-50.
- 傳馬淳一郎・菅野真奈美・谷口恭子・土井典子・棚橋裕子・高島裕美・奥村香澄・瀬野友寛（2025）名寄市と連携した保育・子育て支援事業－2024年度 子育て支援実践報告・「公開保育」の新たな展開－名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター年報, 9, 89-95.
- 寺本尚美・井元真澄・大西隆弘・鎮朋子・花房ナオミ・藤井奈津子（2025）保育者養成を行う大学における子育て支援活動の取組について 梅花女子大学心理こども学部紀要, 15, 17-26.
- 富田道子・権田あずさ・加藤弘美・國清あやか・須崎朝子・深澤悦子・吉原直樹（2024）地域子育て支援拠点事業の現状と課題－広島都市学園大学内施設における利用保護者への第9回 Web 調査から－ 広島都市学園大学子ども教育学部紀要, 11(1), 3-10.
- 辻ゆき子・宮里慶子・岸本みさ子・串崎幸代（2017）子育て支援活動における学生の学び－金蘭おやこクラブの活動内容におけるねらいと課題－ 千里金蘭大学紀要, 14, 63-72.
- 安村清美・内藤知美・斉木美紀子・番匠一雅・清水道代・仙田考・三政洋一・舟生直美・新井貴子（2023）大学内子育て支援施設に関する実践研究Ⅰ－開設期「DCU 子どもひろば：みらい」の企画・運営を巡って－ 田園調布学園大学紀要, 18, 101-114.

[こんどう あや 発達心理学]
[おくだ りえ 教育社会学]
[さかもと あつこ 言語学・英語学]
[なかの けいこ 音楽教育学]